



清水山城と城下・寺院

高島市教育委員会文化財課
主査 横井川 博 之

清水山城の位置

清水山城は、高島市新旭町熊野本・安井川に所在します。高島市の中南部は、安曇川や鴨川によって大規模な沖積平野が形成されています。この安曇川の北岸の西方に饗庭野台地と呼ばれる標高約200m程度の緩やかな丘陵が広がっていて、その南東部に清水山城は位置しています。

饗庭野台地縁辺部には、南北に西近江路（北国街道）がのびていて、台地の南部には安曇川が流れています。このことから、清水山城は、安曇川と琵琶湖の水運と陸路が交錯する「陸路・湖路」の要に位置していたといえます。

清水山城は、戦国期の城館群を見る上で重要な遺跡として、清水山城遺跡、清水山遺跡（屋敷地）、本堂谷遺跡の範囲が、清水山城館跡として平成16年2月27日に国史跡に指定されました。

清水山城と西佐々木一族

『吾妻鏡』によると嘉禎元年（1235）に、佐々木信綱の二男、佐々木高信が高島郡田中郷の地頭として入部し、その一族は、越中、朽木、田中、能登、横山、永田、山崎、平井などの家々に分かれ、戦国時代を通して高島郡一円に割拠しました。

この西佐々木氏一族は、当時の文書に七佐々木、西佐々木七人、高島河上七頭、七頭として名がみられ、江戸時代に記された地誌『近江輿地史略』は、清水山城館跡が位置する「清水山」にあった城跡を、西佐々木一族の

惣領家の佐々木越中氏の城と記しています。

現在、この清水山城の主郭（中心地）からは、室町時代に越中氏の影響の及んでいた高島本庄、高島新庄を含めた安曇川下流域一帯を一望の下に見ることができます。

さて、「清水山」の名称は、現在使われていませんが、城下の平井集落に残る江戸時代の文書には「清水山」の名がみられ、当時、饗庭野台地の中で「清水山」は、「熊野山」と明確に区分されていたことがわかりました。また、「清水山」の名称は文禄4年（1595）の『近江国高嶋郡御藏入書立』が、現在のところ初見とされています。この文書には当時、豊臣氏が押さえた、かつての在地領主・有力土豪の居住地や所領、交通・流通などの要地が記され、「大溝城山」とともに「清水山」が列挙されています。このことから、廃城後も「清水山」の地が重要視されていたことがうかがえます。

次に、清水山城の城主とされる越中氏は、他の西佐々木一族ともに、鎌倉時代には「在



清水山城 主郭東面 畝状空堀群

京人」、室町時代には「奉公衆（外様衆）」と呼ばれる将軍の直轄軍に想定される地位にあり、幕府と強い結びつきを持っていました。

一族は16世紀初頭には、北近江にあったとされる十二ヶ所の関の関守として、その名が見られることから、生産基盤の掌握だけでなく、ルート of 掌握も一族の収入源になっていました。16世紀には、越中氏・田中氏・朽木氏が一族の中で台頭し、16世紀中頃の天文年間になると、越中・田中両氏は六角氏方へ、朽木氏は将軍方につくようになります。そして、観音寺騒動で六角氏が勢力を弱めた後の永禄年間（1558～70）になると、湖北の浅井氏と同盟を結び、元亀元年（1570）以降の織田信長の近江侵攻をむかえることになりました。

清水山城と主郭の発掘調査

清水山城館群とその城下は、標高約210mの丘陵上に位置する清水山城とその南側山腹斜面に広がる清水山遺跡（屋敷地）、山麓台地上の館群（御屋敷・犬馬場）、これらと西谷川をはさんだ西側の本堂谷遺跡、西近江路沿いに展開する城下の町場からなっていたと推定されています。

清水山城は、主郭を中心として三方の尾根上に曲輪を配置する放射状連郭式の山城です。主郭の東面と北西にのびる尾根上に畝状空堀群が認められます。平成8年度の主郭の発掘調査では6間×5間の大規模な礎石建物



清水山城 主郭 礎石建物跡

跡とともに、多数の土器などが出土しました。出土した土器は1550～1570年頃の時期に集中しています。

『信長公記』には、信長が元亀4年7月に「高島に大船で出陣し、陸から木戸・田中両城を攻め、海からは大船を着け、馬廻を従えて攻めた。木戸・田中両城は、降参し明け渡した」と記されています。清水山城主郭から出土した土器の下限は、この信長の高島郡攻略の時期とほぼ一致します。

清水山屋敷地と清水寺

山城南側の山腹斜面に位置する清水山遺跡には、「西屋敷」や「東屋敷」の地名とともに、南北約350m×東西約550mの範囲に、一辺を約20mもしくは25mに規格された方形区画が認められます。

西屋敷には大手道と推定される通路が南北にのびていて、山城南東尾根上の曲輪へと続いています。このルート周辺には「ショウモンヤマ」「オウテ」「ダイモン」の地名が残っています。

この西屋敷は、遺構の特徴から天台寺院清水寺の寺坊群を屋敷として転用した可能性や寺院と城郭の併存も指摘されていました。

城下の今市集落に所在する善林寺の千手観音菩薩立像（高島市指定文化財）は、もとは清水寺にあったと伝えられています。また、文安4年（1447）の文書には佐々木越中氏の若党とされる八田氏や多胡氏、河内宮神主が、



清水山城 主郭出土 輸入陶磁器



西屋敷

清水山にあった清水寺を占拠したことが記されています。本来、清水寺は西屋敷の最上部に位置し、のちに大手道となる正面の道の両側に寺坊群を伴っていたのではないのでしょうか。

一方、東屋敷の方形区画は、西屋敷の区画と比較して、全体的に規則性がないことから、性格や時期の違いなどが考えられます。

御屋敷・犬馬場

清水山遺跡（屋敷地）の南方の山麓台地の南東部には、「御屋敷」や犬追物を開催した馬場とされる「犬馬場」の地名が残っています。

明治6年の『安養寺村地券取調総絵図』には、犬馬場の地名とともに、周囲に帯状の地割をもつ一町四方の区画が認められます。聞き取り調査によると、かつて区画の周囲には、土塁や堀が認められ、方形館と推定されています。犬馬場の方形区画は、越中氏の館＝御屋敷に伴う犬馬場と考えられます。

大手道は、西近江路の平井集落から西に分岐し、この御屋敷・犬馬場の方形区画のエリアを通り、西屋敷を通過して山城の主郭に至っていたと推定されます。

本堂谷遺跡と大宝寺

本堂谷遺跡（井ノ口館）は、清水山城・屋敷地および御屋敷・犬馬場と西谷川を隔てて西側の大宝寺山丘陵中腹の緩斜面上に立地します。東西約350m×南北約200mの範囲に清

水山屋敷地と同様の土塁と堀で囲まれた方形区画群が認められます。遺跡内には「ジョウロウグチ」「エンショグラ」の地名が残っています。また、遺跡の南方にも「ハコヤマ」の地名が残り、かつて土塁や堀で仕切られた地域がさらに南方にまで広がっていました。

遺跡の西隣には、佐々木高信が佐々木氏の氏神を勧請したと伝えられる大荒比古神社が鎮座し、この神社の例祭である七川祭（奴振が滋賀県選択無形民俗文化財）は、佐々木氏が出陣の際に12頭の流鎧馬と12基的を献納したのが始まりとされています。

本堂谷遺跡は、清水寺の寺坊と推定される清水山遺跡と遺構の特徴が似ていることや、遺構の東側が「大宝寺」の跡地と伝承されていることから、本堂谷遺跡も天台寺院の大宝寺の寺坊跡を利用したのではないかと考えられます。

井ノ口集落内にある保福寺の釈迦如来坐像（重要文化財）は、もとは大宝寺にあったとされ、大宝寺が信長の焼き討ちにあった時に、村人によって持ち出され、この寺に安置したと伝えられています。

一方、清水山城主郭から南西方向にのびる谷は「城ノ谷」、城の谷と西谷川との接続部は「城の口」とよばれ、清水山城主郭と本堂谷遺跡を結ぶルートが考えられます。

これらのことから、本堂谷遺跡は、清水山城の出城としての機能や大宝寺との併存も指摘されるところです。



本堂谷遺跡 土橋

清水山城と城下

清水山城の城下は、推定大手道が接続する西近江路に沿って南北に広がっていたと想定されています。

城下の北端にあたる今市は、西近江路と熊野山を通過して若狭に至るルートの交錯地に位置しています。明治期の地籍図には、西近江路沿いに、背割線のそろった短冊形地割が連続して並んでいます。

集落の氏神を祀る佐々木神社の竹馬祭（高島市指定文化財）は、清水山城主の佐々木氏との関わりを示す伝承が残り、子どもが竹馬にまたがって流鏑馬の神事を奉納します。

のちに織田信澄が築く大溝城下町には、新庄町、南市町、今市町の地名がみられ、城下町の形成にあたって高島郡内の町場が移転されました。新庄町は新庄城下の町場、南市町は安曇川南岸の田中の町場と推定され、今市町は清水山城下の町場である今市と考えられています。このことから、今市は、戦国時代末期には大溝城下町に招来されるほど発展した町場になっていたと思われます。

今市とは対照的な集落が、街道の安曇川渡河地点北側に位置する川原市です。応永34年（1427）『宋雅道すがら之記』に、すでに「河原市」の名がみえるほか、集落内にある妙敬寺は佐々木氏が建立したと伝えられ、境内には佐々木高信の墓と伝えられる五輪塔が残っています。また、大荒比古神社は、もとは川原市の字大川原にあったと伝えられていることなどから、佐々木氏との関係が古くから推定される市といえるでしょう。

七川祭における「神御供の式」では、佐々木氏お抱えの鍛冶の子孫と伝えられる「河原市鍛冶」の岡田一党が正座し、他の集落とは異なる特別な扱いを受けています。このことから川原市は、鎌倉期より佐々木氏と密接な関係にあり、佐々木氏直属の職人集団が存在していたと考えられています。

川原市の北に位置する安養寺の集落は、清

水山屋敷地の「地藏谷」にあったという伝承が残っていて、『高島郡誌』によると信長の攻略時に清水山から現在地に移転したと伝えられています。このことから集落北側にある「新村」は、この時に形成されたものであり、戦国期における安養寺集落は「新村」以南に展開していたのではないのでしょうか。

次に大手道が西近江路と交錯する地点に位置する平井集落には、越中氏の家来であった八田氏が居住していたとする伝承が残っています。また、平井村の地籍図には街道と街道から東西にのびる推定大手道に沿ってブロック型の地割が認められることから、武家屋敷群が存在していたのではないかと推測されています。

まとめ

以上、清水山城やその周辺の集落などから、清水山城と城下、寺院との関係を概観してみました。まとめとして、清水山城の城主とされる越中氏は、清水寺、大宝寺、西近江路といった地域がもつこれまでの空間構造に大きな変革を加えることなく、戦国末期までに、清水山城館群とその城下を構成したと考えられています。

今後、城郭と寺院の関係、城下の性格などを明らかにするための発掘調査によって清水山城の性格がより明らかされていくものと思われます。

最後になりましたが、今回の内容は清水山城館跡現況調査委員会と高島市教育委員会が調査を実施し、その調査成果をまとめた「清水山城館跡現況調査報告書」（平成18年3月刊行）の概要を記したものです。この場をお借りして、ご指導頂いた調査委員の先生方に厚く御礼申し上げます。

滋賀文化財教室シリーズ No.219号

発行年月日 2006年3月10日
編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
〒520-2122 大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL(077)548-9780 FAX(077)543-1525